

被災地域と連携した 学生ボランティア活動支援の実践

日本財団ボランティアセンター

×

東北大学 高度教養教育・学生支援機構

成果発信冊子

ご挨拶

東北大学では、2011(平成23)年の東日本大震災を契機として、6月に東日本大震災ボランティア支援室、2014(平成26)年からは、課外・ボランティア活動支援センターを開設することで学生のボランティア活動の支援や地域社会と連携した教育機会の提供に取り組んでまいりました。

2016(平成28)年には、日本財団ボランティアセンター(当時、日本財団学生ボランティアセンター)から学生のボランティア活動に関する支援についてご提案をいただき、震災の伝承や教訓の国内外への発信を目指した協定を2018(平成30)年度より結んでおります。現在では、被災地支援を中心としたボランティア活動のみならず、本学が実施する地域社会と連携したオムニバス講義や課題解決型演習、留学生と国内学生の共修といった講義にもご支援をいただいております。

本冊子では、大学関係者や学生のみなさん、地域の方々のために、本学の教育活動、ボランティア活動の事例をご紹介しますとともに、いかにして地域連携が図られてきたのか、その経緯の記録や得られた成果をまとめております。みなさまにとって、ボランティア活動やその他学生の自主的な活動のサポート、地域連携の参考になれば幸甚です。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 機構長 滝澤博胤

目次

ご挨拶	1
目次	2
事業概要・事業関係者整理	3
授業	4
PBL「被災地復興の課題に取り組む」	5
オムニバス講義「東日本大震災からみる現代日本社会」	6
米国・ベイラー大学との協働プロジェクト	7
事例 学生活動	
学校防災ツアー	8
子どもの貧困問題解決に向けた取組みに学ぶボランティア体験プログラム	9
2019年度 台風19号緊急災害支援 丸森派遣	10
留学生向け震災伝承ツアー	11
課外・ボランティア活動研修会	12
東北大学学生ボランティア支援10年検証シンポジウム	13
実施事業一覧	17

事業概要

東北大学と日本財団ボランティアセンターが連携する本事業は、東北大学が2011年に発災した東日本大震災の被災地でボランティア活動を進めている中で、同センターの前身である公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（通称Gakuvo）より、学生ボランティア活動推進事業の提案があったことをきっかけとしている。その後、東北大学高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）の課外・ボランティア活動支援センターとグローバルラーニングセンターの2つの業務センターが中心となり、連携協定の構想を始めることとなった。

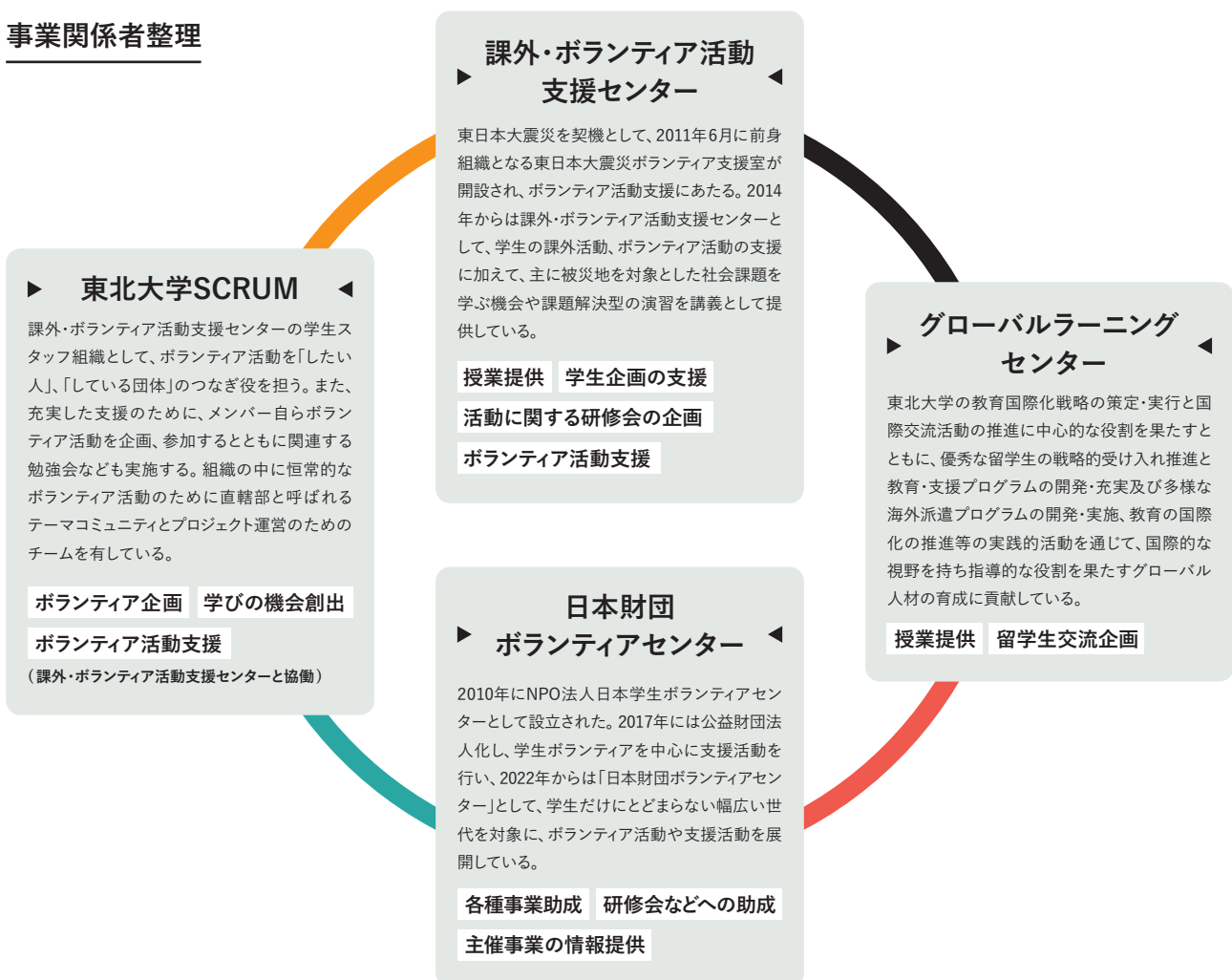
Gakuvoと2つのセンターによって、「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」と題した事業を2018年度から進めていくこととし、機構とGakuvoとの間で「学生ボランティア活動推進に関する協定」を結んだ。

この協定は、自ら率先してボランティア活動を主導するボランティアリーダーの育成や被災地の現在を伝える被災地アンバサダーの育成を目的としており、これに資する事業を正課（授業）と課外活動の両面から実施してきた。

事業の成果として、2018年からの5カ年において、延べ10科目の授業開講と31件のボランティア活動の企画や活動に関する支援事業を展開することができた。また、ボランティア活動に携わる学生のスキル向上や学内外でのハラスメントなどを防止するといった目的の課外・ボランティア活動研修会は19回実施している（2022年12月現在）。

東日本大震災からの復興は未だ道半ばであるが、この手引きでは、これまでの協定事業において被災地域と協働して実施してきた授業とボランティア活動の事例を整理するとともに、東日本大震災に端を発するボランティア活動支援のあり方を検討したシンポジウムの記録も掲載している。

事業関係者整理



ボランティアの主導的役割を担う人材の育成、復興における現状と課題を発信する被災地アンバサダーの育成

PBL「被災地復興の課題に取り組む」

社会課題の背景とその解決方法を考える

講義を通じた東日本大震災からの復旧復興に資する取り組みを継続している。2021年は、宮城県と福島県を対象に被災地の課題を学ぶ講義とフィールドワークを行い、そこから得られた知見に基づき、学生が被災地の課題解決に資する取り組みを企画する講義（Project (Problem) Based Learning）を開講した。

連携主体

課外・ボランティア活動支援センター教員
一般社団法人みやぎ連携復興センター（宮城県）
特定非営利活動法人コースター（福島県） ほか

2021年度連携先団体

特定非営利活動法人コースター
福島県を対象に、地域の社会的課題の解決に取り組む人材の育成及びその促進のための社会的基盤整備に取り組んでいる。

一般社団法人みやぎ連携復興センター
東日本大震災からの復興に資する活動に対する積極的な支援を展開している。また、コミュニティ形成事業にも力を入れている。

連携の経緯

課外・ボランティア活動支援センターでは、東日本大震災の被災地の課題解決に資する学生の活動を授業、課外活動の両面で支援している。日本財団ボランティアセンターとの協定事業を結んだ2018年以来、現地で活動するNPO法人や支援団体をパートナーとして学生が主体的に課題解決に取り組む講義を開講してきた。ここでは2021年の開講実績について紹介する。

実施内容

2021年は、宮城県仙台市と福島県双葉郡を対象に講義とフィールドワークを実施した。宮城県を対象とした講義では、仙台市の被災沿岸地域にある災害公営住宅の町内会と連携し、震災後に生まれた新たなコミュニティづくりに資する企画提案として、学習支援や交流企画の提案を行った。福島県を対象とした講義では、広野町にある県立ふたば未来学園高校の生徒へのインタビューから、高校生世代の避難経験の記録と被災地の現在を発信する企画を行った。

プロジェクトの成果と今後の展望

受講者の振り返りから、仙台市の災害公営住宅のプロジェクトでは、町内会を対象としたイベント企画を通して、震災後の生活支援の重要性を学び取っている様子が見られた。また、福島県の公立高校を対象としたプロジェクトでは、インタビューを通じて身近な世代の被災者と触れ合うことで当事者意識の萌芽が見られた。一方で、受講者はコミュニティ支援活動、被災者へのインタビューと情報発信という性質の異なる活動に取り組んだが、その振り返りからは共通して、「コミュニティの希薄化」や「地域の担い手不足」といった課題も挙げられている。東日本大震災からの復興過程においては、地方の人口減少、まちづくりの担い手不足など平時の課題が顕在化したと言われるような課題があり、今後さらに深刻化していくと考えられる。2022年度からはカリキュラムの再編があったが、引き続いて被災地を対象とした課題解決型の演習を続けており、10年以上が経過した被災地で課題解決に取り組みながら、社会的課題を考える力を養う講義を地域のパートナーと継続して展開していきたい。



福島県富岡町でのフィールドワーク



企画検討のグループワーク

オムニバス講義「東日本大震災からみる現代日本社会」

震災で顕在化した現代日本社会の課題を学ぶ

本講義は、被災当事者の講話や被災地フィールドワーク、被災地の課題に取り組む実践者の講演などを通して、被災や復興の現実、そして現代日本社会の課題に接近する科目である。開講以来、復興ボランティアに参加する学生が震災に関する学びを深める機会になるとともに、学生が復興ボランティアへの一歩を踏みだすきっかけを提供してきた。

連携主体

課外・ボランティア活動支援センター教員
東日本大震災の被災当事者
東日本大震災の復興支援等に関わる研究者・実践者

2021年度連携先団体

被災当事者：青木淑子氏(NPO法人富岡町3.11を語る会)、
佐藤敏郎氏(大川伝承の会)ほか
支援者：鈴木平氏(NPO法人TEDIC)、桃生和成氏(一般社団法人Granny Rideto)ほか
専門家：東北大学 村松淳司、佐藤翔輔、御手洗潤 ほか

連携の経緯と概要

本講義は、主に学部1年生・2年生を対象とする教養科目であり、2017-2021年度に開講してきた。2014年度から前身科目となる開講が始まったが、被災地の課題に取り組む実践者を招へいすることに主眼があり、活動の背景にある被災の現実や復興の課題の十分に伝わりきらない状況があった。そこで本講義では、被災当事者による講話や震災遺構・復興情報館等でのフィールドワークを新たに取り入れている。さらに専門教育に進むうえでの動機づけとして、学内外の研究者による関連分野に関する講演も組みこんでいる。

授業は全15回で、冒頭回では被災当事者による講話を入れることが通例となっている。その他の回では、被災や復興の現実を現代日本社会の課題とつなげ、紹介している。主なテーマは「防災と伝承の課題」「復興まちづくりの課題」「原発事故と復興の課題」「マイノリティの課題」「子ども・教育の課題」であり、課外・ボランティア活動支援センターの教員が被災地でのボランティア活動支援で培ってきた人脈も活かし、講師を招へいしてきた。

プロジェクトの成果

第一に、学生が被災の現実や復興の課題について学ぶ機会を提供し続けてきたことがある。特に被災三県以外から入学した学生にとっては、被災当事者の経験に初めて触れる機会となり、震災が必ずしも他人事ではないという態度を習得するきっかけにもなってきた。また復興ボランティアに参加する学生にとっては、被災地が現在進行形で直面する課題を改めて理解し、活動の方向性を検討する機会にもなってきたといえる。

第二に、被災地の抱える課題や課題解決の方向性が現代日本社会のそれとつながりうるという視点を提供してきたことがある。「被災」は災害大国日本で生活する市民にとって無関係でいられない。「マイノリティ」や「子ども・教育」に関する課題なども平時から存在する。そこで被災地の実践とそれぞれの市民生活や専門分野での実践を接続し、現代日本社会の課題解決に活かすきっかけを与えてきたと考える。



フィールドワークの様子



被災当事者による講話の様子

米国・ベイラー大学との協働プロジェクト

東日本大震災の経験を海外の学生と共に学ぶ

2011年の震災以降、米国・ベイラー大学(Baylor University)の学生と引率教員が南三陸町を訪問し、ゴミの片付け、地域住民との交流などを行ってきた。2017年からは東北大学の学生との協働プロジェクト「Humans of Minamisanriku」を立ち上げ、南三陸町に暮らす住民にインタビューを行い、南三陸の魅力や生き生きとした人々の暮らしを世界に発信する活動を行っている。

連携主体

渡部留美(グローバルラーニングセンター 准教授)
プレフューメ 裕子(ベイラー大学 上級講師)
プロジェクト参加学生

2021年度連携先団体

ベイラー大学は、米国・テキサス州にあるミッション系私立大学である。日本語の授業が開講されており、日本に興味のある学生がこのプロジェクトに参加している。本学とのプロジェクト交流がきっかけとなり、2018年に学術交流協定を締結した。

連携の経緯と概要

ベイラー大学は、東日本大震災翌年の2012年に、「Baylor in Japan」という約1ヶ月間のサマープログラムを立ち上げ、期間中の数日間、南三陸町を訪問し、交流やボランティア活動をおこなってきた。2017年からは、プレフューメ、東北大学グローバルラーニングセンター講師島崎薫(当時)ら複数の教員が、南三陸町元消防職員佐藤誠悦氏らの協力を得、東北大学との協働プロジェクト「Humans of Minamisanriku」を開始した。東北大学とベイラー大学の学生が協力して南三陸町とそこで暮らす住民の方々へ個別インタビューをおこない、南三陸の魅力やそこに暮らす素敵な人々を紹介する数分程度の英語字幕付き動画にして公開し、世界に発信している。学生はグループごとに事前準備(Zoomでの顔合わせや質問項目の検討)をしておき、インタビュー当日は、南三陸に1泊2日で滞在し活動をおこなう。

【参考リンク】「Humans of Minamisanriku」

<https://youtu.be/yyIRGfvssAo>

プロジェクトの成果と今後の展望

ベイラー大学の学生にはこの経験を活かし、生涯を通じて社会に貢献できる人材になること、東北大学の学生には東日本大震災について学び、日本語と英語を使いながらの協働作業を通じて、コミュニケーション能力の向上や国際的な視野を広げることが目的として掲げられている。多様な文化背景をもつ学生との協働作業は大変なこともあるが、作業を終えるころには達成感で満ち溢れ、学生同士も打ち解けている。東北大学の参加者のなかには福島や宮城の被災者も含まれており、どの学生も震災について学びたい、現状を世界に発信したいという気持ちを持ち、国際交流に積極的な学生である。このプロジェクトを経験することで大きな自信になり、その後の学生生活、社会人生活にも少なからず良い影響をもたらしていると思われる。震災から10年が経過したが、経験や人々の思いを風化させないためにも本プロジェクトを継続していくことが不可欠であると考えている。



東北大学でのキックオフミーティング



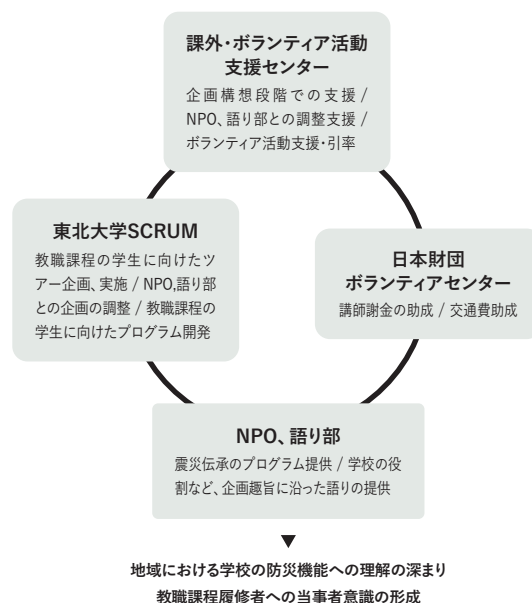
文字起こしと翻訳作業



プロジェクト終了後の集合写真

学校防災ツアー

地域防災の拠点のあり方を考える



概要

災害時に地域の避難場所等となる学校における防災のあり方について、東日本大震災を事例とした企画を実施した。具体的には、宮城県沿岸部や岩手県沿岸部の津波被災地へ赴き、当時、学校の教員や生徒だった語り部から避難行動の実際や教訓を学ぶとともに、教職を志す学生に向けて、防災の知識を深めるツアーとワークショップを企画、実践した。

Q1.企画に関わった背景

ボランティア活動に従事する中で、被災地で震災遺構とされているいくつかの学校を回る機会を得ました。学校は災害時に地域の避難場所としても機能していることから、その役割について考えたいという思いで企画しました。また、個人的な経験になりますが、2011年、私は山形県に住んでいました。当時は小学生で、経験したことのない大きな揺れに恐怖を覚えたのですが、その時は何も考えずにただ学校の先生の言うことを聞き、避難することしかできませんでした。一方で、被災地では同年代の子どもたちが避難行動の最中に犠牲になっているという事実を鑑みると、学校防災をテーマに扱うことの重要な意義に気づき、それが活動の大きなモチベーションになりました。

Q2.企画をする上での工夫

被災地を巡るツアーはいくつもありますが、その多くは、当時の被災状況を想像するしかできないことが課題だと思っていました。学校防災ツアーでは、語り部の方に当時、避難した場所と一緒に歩いてもらいながら解説をしていただくなど、想像で終わらせず、実際の避難の大変さを理

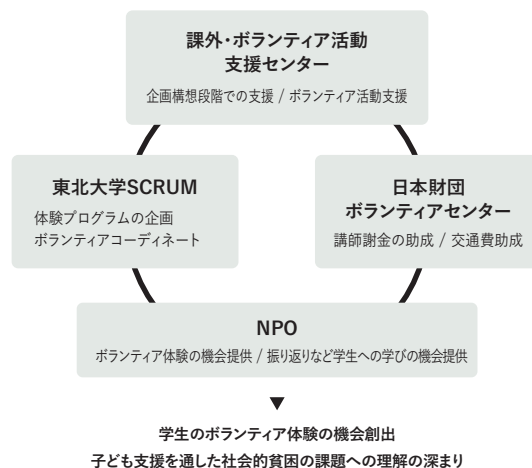
解する体験を作ること意識しました。また、被災地となった沿岸部に宿泊するときには、指定避難場所まで参加者全員で歩いてみるなどの工夫をすることで、参加者にも命を守る行動を意識づけることができました。

Q3.企画を通して得られた知見、印象に残ったこと

このツアー企画で被災地に宿泊したときに、初めてそのまちに暮らす人の生活に思いを致すことができました。それと同時に、普段、いかにリスクを考えずに生活しているのかということも思い知りました。東北大学の周辺も大雨などの災害時には避難が必要な場所がいくつもありますが、私たちは普段そうしたことに意識を向けていません。学校防災ツアーは教職を目指す学生を対象とした企画でしたが、学校防災を切り口に、参加者に暮らしの中で命を守ることを大切さと難しさを伝えることができたと思います。

子どもの貧困問題解決に向けた取組みに学ぶ ボランティア体験プログラム

子供の貧困の実態や解決に向けた取り組みを学ぶ



概要

2019年8月から10月にかけて、ボランティアの裾野を広げ、子どもの貧困問題を学ぶために、せんだいこども食堂、NPO法人TEDICを対象にボランティアの体験プログラムを実施した。

Q1. 企画に携わった背景

マイノリティを抱える友人を理解したいと思った経験から、SCRUMの中でも共生社会を考える人権共生部に参加しました。その活動の一環として、子どもの貧困についてボランティア活動から考える本企画を先輩方と一緒に運営しました。

Q2. 工夫した点

私自身も学習支援のボランティアに参加しながらの運営となりました。ボランティアに携わる学生を増やすために、運営は参加者にとっての関口を広くしておく必要がある一方で、ただ「楽しかった」で終わらせない工夫も求められました。この企画では、異なる活動先に参加した学生間のグループワークの機会を設定し、活動の感想共有のみならず活動を通して新たに生じた疑問や自身の専門分野と照らし合わせて興味を持ったことなどについてディスカッションするとともに参加者が今後自分で何ができるのか考えてもらうような振り返りを設定しました。

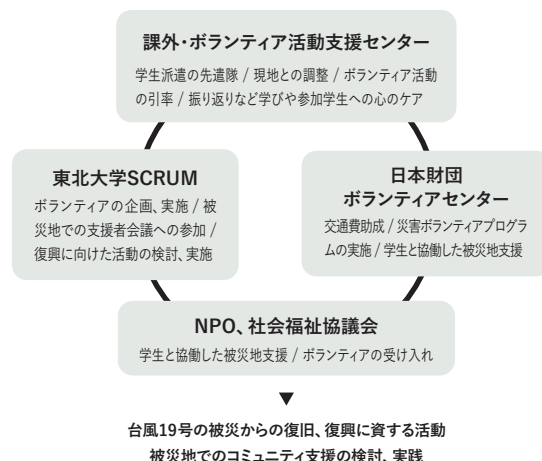
Q3. 活動を通して得られた知見

フリースクールのボランティア活動に参加した際、不登校の小学生が中学生に悩みを相談している様子を見て、こうした学年を超えた多世代の交流は普通の学校ではなかなか起こらないフリースクールならではの光景だと思いました。特に精神年齢が高い子などは、学校の中で周りの子どもたちと意見が合わず、うまく立ち振る舞えないことがあります。そうした場合に、年上の他の子どもが話し相手になることで、安心して話すことができる関係性を築くことができおり、フリースクールは学習支援の場だけではなく、「居場所」として機能しているのだと再認識しました。

活動の振り返りの機会には、参加者から「自分が「社会的に正しい」と思っていたことが、いかに「自分だけの正しさ」であったか思い知った」といった感想があったことも印象的でした。子ども一人一人に学習支援にたどり着くまでの背景があるように、社会課題もその背景は多面的かつ複合的です。ボランティアはその一つ一つに向き合う必要があるのだと一年生の早いうちに気づいたことで、復興に携わる他のボランティア活動においてもそのことを心に留めて取り組むことができました。

2019年度 台風19号緊急災害支援 丸森派遣

被災地支援を通して、支援のあり方を考える



概要

2019年10月に発生した台風19号で甚大な被害があった宮城県丸森町で、発災直後から支援活動を実施した。具体的には、災害ボランティアセンターや現地の支援団体等と連携しながら、被災家屋での泥だし、避難所・仮設住宅でのサロン活動、神社の復興支援といった多岐にわたる活動を行なった。コロナ禍の影響で2020年2月に終了を迫られたもの、27回の活動を企画し延べ279名が参加した。

Q1.企画に関わった背景

熊本や広島の実害後に支援活動を行う先輩方の背中を見ていたのは大きかったと思います。台風19号による宮城県内での被害のニュースを見て、同じ宮城県民として、何か出来る事をしたいと私も含め団体幹部の多くが考えていました。

発災2日後に先生方に連れられ丸森町の被災状況を目の当たりにし、その後被災者や支援者との関わりが増えていく中で意欲や責任感も芽生え、継続的、主体的に支援活動を行いました。

Q2.企画を行う上で工夫した点

一つ目は「綿密なコミュニケーションをとる」という事です。発災後のニーズは多岐にわたり、刻一刻と変化していました。その時の優先順位に応じてニーズとリソースを組み合わせ最適な支援活動を行う為に、被災者、支援者、活動経験豊富な先輩に相談し、学びながら実践する事でより良い活動を模索しました。

二つ目は「役割を考え、分担し協力する」という事です。丸森町には経験豊富な支援者が集まっていたのですが、我々

は素人でした。支援者の方と活動する中で、「学生だからこそその役割」「SCRUMとしての役割」といったものを見出して頂き、協力してより効果的な支援を行いました。旧 Gakuvo(現日本財団ボランティアセンター)からボラバスのノウハウを提供して頂き、ソフトの支援へと活動の幅を広げる事が出来たのは分担と協力の成果だと思います。

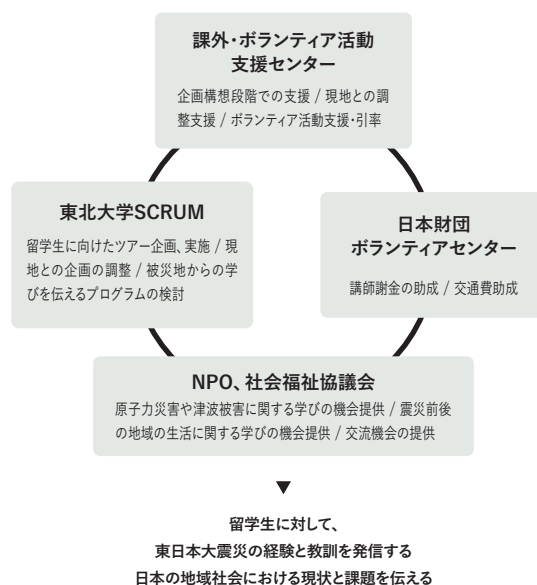
Q3.得られた知見、印象に残った事

一つ目は「泥を見るな、人を見る」という考え方です。ハード支援においても継続的に同じ現場に入る事ができ、単なる力仕事ではなく、被災者とのコミュニケーションが大切であるという事を学びました。特に、重機を降りて住民と話すプロボノの方の姿は印象的でした。

二つ目は「支援の引き算」という考え方です。緊急期を過ぎた仮設住宅での支援等において、将来的な住民の自立や住民自治の確立を目標に、支援活動を模索した事が印象に残っています。たとえその場で住民から喜ばれたとしても、やってあげ過ぎる、与え過ぎる事が地域にとってマイナスになり得るという事も学びました。

留学生向け震災伝承ツアー

東日本大震災の経験を海外へ伝える



概要

東北大学の留学生を対象に、東日本大震災の経験や教訓を伝承する企画として、宮城県内の被災沿岸地域や福島県双葉郡でのツアーを実施していたが、2020年度からはコロナ禍の影響から、国内にいる学生を対象とした企画に切り替えて実施している。

Q1.企画に関わった背景

名古屋:英語を話す機会を求め、SCRUMの国際部へ加入しました。合わせて、福島県で活動を行うサークルにも加入し、震災復興や伝承を海外の人に伝え発信していくことに、関心を持ちました。

高橋:同じく英語を使う機会を求めて国際部の活動に参加しましたが、コロナ禍もあり、まずは国内学生のみで震災伝承のためのスタディツアーや交流企画を実施しました。

Q2.企画を行う上で工夫した点

名古屋:福島県でのツアーや宮城県南三陸町のツアーなどを企画しました。留学生と一緒に被災地を巡る上では、言語的なハードルに加えて、文化的な背景が違う学生たちへ、どのように東日本大震災の被害や復興について伝えていくかという点で難しさがありました。そこで、例えば福島県であれば原発事故や被害についての資料をまとめ、参加者に配布するなど事前学習、研修の機会を設けました。

高橋:コロナ禍もあり、留学生と直接的な交流の機会が取れない中で被災地の経験を発信するにはどうしたら良い

か考えていきました。まずは国内学生を対象に南三陸町を対象にツアーを企画し、語り部の方のお話を通じて震災前後の暮らしについて、学びを深めました。また、コロナ禍以前から入国している留学生などを対象にした勉強会や交流会も企画しましたが、広報には課題も残りました。

Q3.活動を通して得られた知見

名古屋:地域の方々との交流の機会を設けたこともあり、留学生には震災の被害だけではなく、日本の地方での暮らしについても知ってもらおう企画にすることができました。また、留学生と授業以外の話題でコミュニケーションを取ることができたのも、振り返れば貴重な経験になりました。高橋:留学生との活動は難しかったのですが、2022年度は国際部の活動で生まれたつながりからSCRUMとして被災地での震災伝承のイベントにお声がけいただき、参加することができました。今後は、日本を訪れる留学生も増えていくことから、あらためて被災地の経験を発信していく取り組みが求められていくと思います。

課外・ボランティア活動研修会

課外・ボランティア活動支援センターでは、学生ボランティア団体の活動において必要となるスキルやハラスメントなど活動で遭遇する危険性のある事象への対応方法を学ぶことを目的とした研修会を年に3、4回程度実施している。ここでは、その一例を紹介する。

2018年

災害ボランティアセンター・運営サポーター 養成講座

講師：仙台市社会福祉協議会

災害時に立ち上がる災害ボランティアセンターに関する基礎的知識のガイダンスと運営サポーターとしての役割の体験を実施した。

災害時に立ち上がる災害ボランティアセンター役割についての理解を深めるとともに、緊急時に学生ができる役割であるボランティアセンターの運営サポーターの業務について、模擬的なワークを通して実践的に学んだ。学生からは、ボランティアを円滑に進めるためのサポートの重要性への気づき、寄り添いの重要性への気づきなどの振り返りが見られた。なお、本研修は2022年度も実施している。



2021年

ハラスメント防止に役立つ コミュニケーションスキル ～自分も相手も大事にする主張の仕方～

講師：小野彩香（認定NPO法人Switch理事/精神保健福祉士、社会福祉士）

活動先や団体内において正しく自己主張することでハラスメントを防止する方法を学ぶことを目的に研修を実施した。

ボランティア活動においては、相手を尊重しながら正しく自己主張をすることが困難となる場合がある。これは学生のみならず、受け入れを行う地域にとっても同様である。研修では、誰もが意思や意見を表明する権利があることを認める環境づくりや相手の主張を受け入れた上で自己の主張を展開する技法について事例を基に学んだ。学生からは、対話における自己の特性を理解する機会となったという振り返りが見られた。



2020年

オンライン・ワークショップ入門 ～今こそ考えるボランティア活動の意義～

講師：青木将幸（青木将幸ファシリテーター事務所 代表）

コロナ禍での団体運営に関連したオンラインミーティングのノウハウを専門家から教授いただいた。

従来、対面で活動に関する意思決定を行ってきたことから、学生団体は全面オンラインでのコミュニケーションを強いられる環境への対応に苦慮していた。そのため、相互理解や成果を生み出すファシリテーションについて講師からレクチャーがあった。後半は、実際にオンラインミーティングの実践によってその技法の習得を図った。参加者からは、ツールの効果的な使い方やオンライン特有のリアクションの難しさを克服する方法を学んだという振り返りがあった。



2022年

第3回 課外・ボランティア活動研修会 キャッチコピーをつくるためのヒント

講師：松村洋（ムードセンターまつむら 代表/広告プランナー、ディレクター）

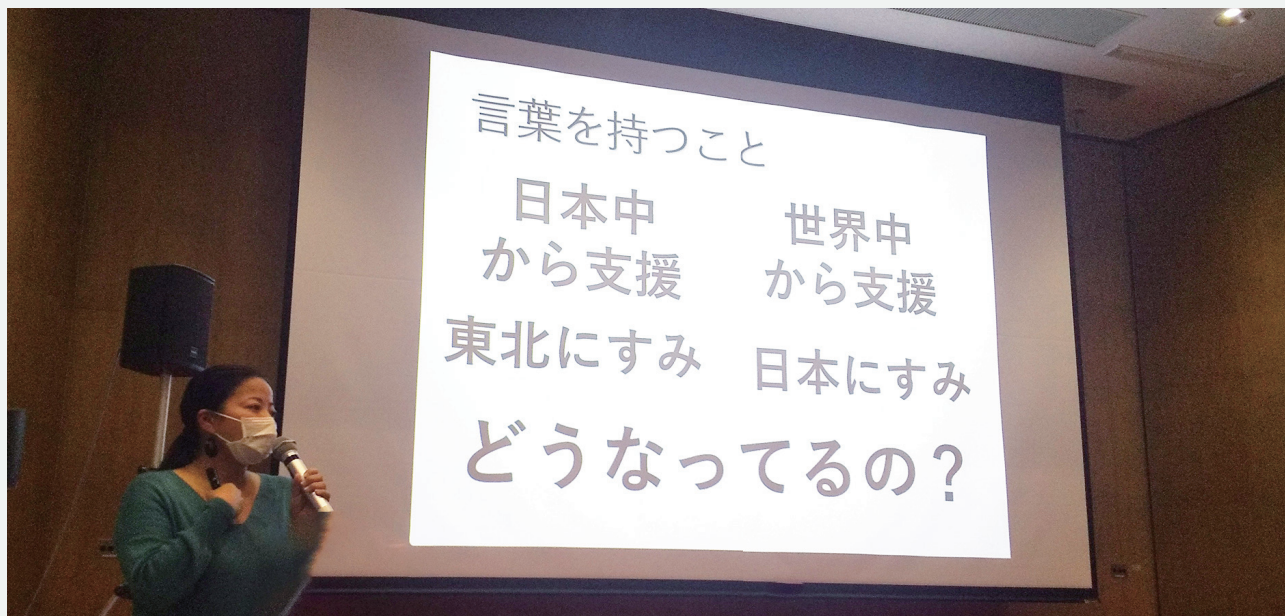
団体の活動を端的に伝えるためのポイントや広報におけるメッセージの作り方を学ぶ。

松村氏からは広報の基本的な考えや対象者はどのような認知プロセスを経て、活動に参加するようになるか、といったマーケティング視点での広報の方法に関するレクチャーがなされた。その後は、参加学生が実際に自団体のキャッチコピーを考えるワークショップを実施した。参加者からは、これまでの広報において見直すべきポイントがはっきりしたという意見や応用してふりかえりにも使える知識が得られたという感想があった。



東北大学学生ボランティア支援10年検証シンポジウム

高度教養教育・学生支援機構と日本財団ボランティアセンターの協定事業の締結から5年を前に事業検証を行うとともに、東日本大震災から10年が経過し、この間の学生ボランティア支援を振り返る目的として、関係者を集めたシンポジウムを2021(令和3)年12月5日(日)に開催した。以下では、シンポジウムの一部を抜粋して掲載する。東日本大震災発災直後、東北大学の学生ボランティア支援はどのように立ち上がり、機能してきたのかについて、教員と学生、地域の方それぞれの視点からまとめている。



第一部 10年の取り組みの意義・検証

登壇者

米村 滋人 東京大学法学部教授

藤室 玲治 NPO法人被災地に学ぶ会代表/元課外・ボランティア活動支援センター 特任准教授

松原 久 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教

司会進行 高橋 結 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教

※敬称略、所属は2021年12月現在のもの

学生の主体性から始まったボランティア支援

米村:2005年から2013年まで東北大学に籍を置いており、東日本大震災の直後から教員の立場でボランティア支援を含めた災害復興に携わってまいりました。本日は当時のことを振り返りながらお話をさせていただきます。

震災直後は、学生が自主的にボランティアを始めていました。そもそも、東北大学には震災以前にはボランティアを行う学生団体も大学としての支援組織もなかったことから、学生の有志がいくつかのグループに分かれてボランティア活動を進めていったわけです。一番大きなグループは現在もある地域復興プロジェクトHARUであり、最大1000人を超える学生が登録していました。しかし、それだけ大きな組織の運営には困難もあり、2011年5月には活動を休止することとなりました。このほかにも多くの大学生が大小問わずグループを形成しており、大学としても支援が必要

であるということで、同年6月下旬に「東日本大震災学生ボランティア支援室」が設置されました。私は9月より、その運営担当教員をお引き受けしましたが、室長と2名の運営教員の他にはスタッフもない組織でしたので、学生の皆さんに実働を担っていただくこととなり、12月から学生スタッフを含む支援室(後に学生スタッフはSCRUMとして独立します)が運用されることとなりました。学生スタッフと一緒に様々な企画を検討、実施しましたが、当時は当然ノウハウもなく、他大学や学生スタッフの伝手を通じて紹介してもらった外部団体のツアー等に相乗りさせていただくこともありました。これを繰り返していくうちに、学生スタッフにもノウハウが蓄積し、急速に企画力が上がっていき、お茶会や手芸、足湯などのボランティアも学生主体で実施していくようになりました。

2013年度からは、「基礎ゼミ」という東北大学の初年次教育の科目を経済学研究科の西出先生と担当させていただき、授業でもボランティア活動を取り入れることができました。これは一つの

シンポジウム

重要なポイントになりました。そもそも、学生スタッフによってボランティア支援を運用しようとしたのは、教職員の機動力不足からくる新規のボランティアニーズ、状況変化への対応を担ってもらうという狙いのほかに、学生のニーズは学生が一番よくわかっている、学生目線で企画をしてほしいという思いからでした。また、支援室の黎明期には、まだ外部団体とのつながりもないので、既存の団体に自主的に参加している学生の経験や人脈を還元してもらうことにも期待していました。結果として、期待以上に学生の皆さんが活躍してくださって、支援室の活動は軌道に乗っていったと理解しています。

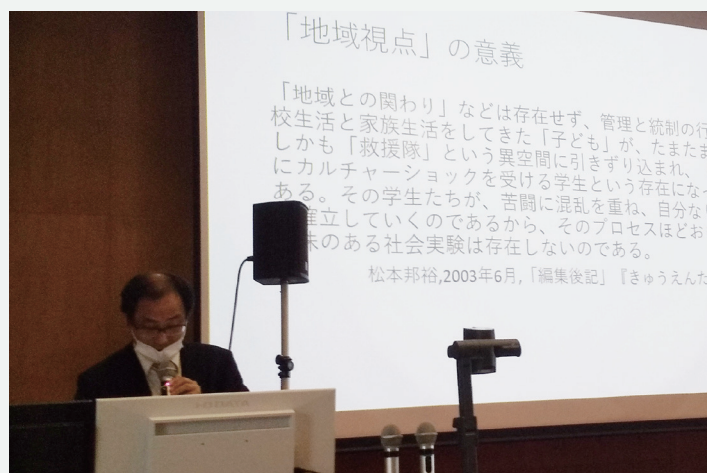
ボランティアとは何かを問い直す

藤室：私は大阪で生まれ、神戸で育ちました。地元の神戸大学に通っていた時に阪神・淡路大震災を経験し、その後仮設住宅の支援や路上生活者の方の支援をボランティアで行った経験から、2008年には神戸大学の学生ボランティア支援室のスタッフとなりました。東日本大震災の発災当初は、岩手県陸前高田市で活動をしていたのですが、そこで東北大学と一緒にご縁から、2013年からは東北大学で勤務し、2015年には特任准教授となりました。

米村先生のお話にもあった通り、支援体制ができて間もない東北大学のボランティア支援では、「ボランティアとは何か」ということを学生と一緒に考え直す機会もありました。例えば、復興住宅や仮設住宅のコミュニティ支援については、「お手伝い」と何が違うのかといったことです。当時の東北大学の先生からは「単なる手伝いではないのか？果たしてそれは学生がやるべきことなのか？」という提起をいただいたこともあります。私はお手伝いやご近所付き合いを否定したいのではなく、むしろ社会に出ていく準備段階の大学教育の中では、学生にはそうしたことが当たり前になるようになってもらえるようにすることも重要な役割の一つだと思います。ただしそれは、一朝一夕で身につくものではなく、漫然と活動しているだけでは気が付かないことでもあります。そのため地域の方と共通の目標を立てて一緒に活動するなかで、コミュニケーションと振り返りの機会を用意していきながら、自分も相手も変わっていくことを学ぶプロセスをボランティアで体験してもらうことが授業や課外活動の大きな意味であると考えています。

授業とボランティア活動のリンクを生み出す

松原：私の方からは授業とボランティア活動のリンクというテーマで現在のボランティア支援をお話しさせていただきます。課外・ボランティア活動支援センターが提供する授業の一つに、「東日本大震災から見る現代日本社会」という科目があります。この科目



は、ボランティア活動をするのはハードルが高いと考えるような学生に向けて、東日本大震災からの復旧復興の課題について、オムニバス授業から多面的に学ぶ講義です。本当に様々な角度から毎回お話をいただくのですが、特にマイノリティをめぐる課題については学生から自分自身では気づく機会がなかったがこの授業をきっかけに考えてみたいといった振り返りを毎年いただいております。震災を通して社会を見ることは非常に大事だと感じてきました。また、もう一つ力を入れてきた授業に「被災地復興の課題に取り組む」という名前で開講している課題解決型演習があります。この講義は、支援団体の皆様と協働しながら地域課題の解決を学生と考え、実践するというものですが、「地域も学生もお客様にしない」ということを意識して講義をつくっています。そのためには、藤室先生のお話にもあった通り、「共通の目標」を作り、同じ方向を向いてやっていくことが重要だと思います。

たとえば、学生が地域のコミュニティづくりのために何か企画を作りたいと相談したとき、公営住宅の自治会長の方から「高齢の方が集まっているお茶会があるから、その人たちに声をかけて一緒にやろうか」とご提案をいただいたことがありました。その提案に対して学生から「そのお茶会は本当に高齢の方の息抜きの場になっているんですか？」や「実は子どもたちも息抜きしたいんじゃないですか？」と言った別の角度からの提起があり、「子どもと高齢者をつないでみたらどうか」という新しい活動の企画が生まれたことがありました。これは一つの例ですが、自治会長と学生がある種真剣に意見を交わし合ったことで、地域にとって学生が入ることで与えられる良い影響であったものと思います。こうしたボランティア活動がきっかけで提供できる小さな貢献も、研究、教育と並んで大学に求められる社会貢献、地域貢献になっているのではないかと考えています。

第二部 リレートーク 学生の取り組み紹介と関係者からのコメント

登壇者

穴澤 ゆず インクストーンズ/生命科学研究科博士前期課程1年

阿部 晃成 波板EDGE代表

武田 萌 たなぼた/農学研究科博士前期課程2年

宇津 敬祐 たなぼた/教育学部4年

田上 琢磨 一般社団法人石巻じちれん

渡邊 勇 もしとさ/工学研究科博士前期課程2年

藤間 千尋 公益財団法人3.11みらいサポート

司会進行 松原 久 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教

※敬称略、所属はすべて2021年12月現在のもの

① 継続した被災地支援の取り組み

社会の中での私を考える

穴澤:私は、石巻市雄勝町にある波板という小さな地域でボランティア活動をしていました。高齢化率は非常に高く何もしなければいずれ消滅してしまう地域なのですが、住民の方が主体となって、「地図から波板という名前を消さないようにしよう」と精力的に活動されています。この活動の中では、社会のルールやこの社会の中で私はどう思われているのかということを見つめ直すことができたことが大きな学びだったと思っています。

大学に入るまでの私は、田舎の小さな高校で過ごしていて、特にアルバイトの経験があるわけでもなかったことから、ボランティア活動が初めて社会に出る経験になりました。いざボランティア活動をはじめてみて出会ったのは、私のことを「頭のいい大学生」だとか「若いお姉さん」だとか、属性でしか語らない人たちでした。「社会の中で自分はこういう風に見られているんだ」と知ったことは衝撃でした。しかし、翻って考えてみると、私も地域の高齢者を「おじいちゃん」、「おばあちゃん」程度の解像度でしか見ていなかったことに気づきました。活動を重ねていく中で、「〇〇地域の〇〇さん」という風に私が認識し、しっかり向き合っていくことで初めて私も「東北大学のゆずちゃん」として関係性を結ぶことができるようになりました。

しかし、そうした関係性を結んでいくにつれて、生活における不満や課題についても地域の方からあけすけな話を聞くことになりました。私はなぜそうした話題が出てくるのかということに戸惑いがあったのですが、センターの教員からボランティアの対象地域の背景や一般的な社会課題の整理をしていただいたことで、それをもやもやとして終わらせず学びとして消化することができたと思います。

最後に、ボランティア活動では、社会のルールについても気づきを得られたと思っています。例えば新しい団体や地域と連携する上では、アポイントをとったり、お電話をかけてご挨拶に行ったりなど礼儀や企画を伝えるためのプロセスがあるかと思うのですが、そういったことが最初のうちは頭になかったのが、苦労しました。これはどう振る舞ったら大人としてしっかり扱っていただける

のかという些細な気づきなのかもしれませんが、ボランティアを通して得られた確かな学びだったと思います。

ボランティアを受け入れる難しさ

阿部:私は石巻市の雄勝町で住民組織を立ち上げながら、復興に取り組んできました。穴澤さんの整理にもあったように、波板は小さな集落ながら地域住民が主体性を発揮し、まちづくりに取り組んでいます。だからこそ、大学生でボランティアに来られた方の主体性についてもすぐに気づくことができます。中には、強制的に参加させられている学生の方もいて、そうしたかたがいらっしゃると地域も付き合い方が難しいと感じてきました。

一方で、主体性があれば良いということでもなく、学生の皆さんを受け入れると、時には地域のことを知らないの、被災地一般の課題観だけで地域の実情に合わないイベントや企画を実行しようとする方もいます。支援して下さる方を無視するわけにはいけないので、丁寧に対応しようとするのですが、その結果地域が疲弊するということもかつてはありました。その点で、東北大学をはじめ県内の学生の皆さんは主体性がありながら、地域に寄り添おうという気持ちがある方が多く、非常に得難い存在だったと思っています。特に東北大学の場合には、地域の現状把握から一緒に取り組んでくださって、学生の皆さんが調べてくださった情



シンポジウム

報をもとに地域づくりの計画を立てることもあります。この関係性に至るには、穴澤さんのお話にもありましたが、顔が見える関係になるまで継続的に関わっていただくとともに、地域の側も意識転換が求められました。伴走してくださる方を属性ではなく個人として見て、仲間として付き合っていくということではまだまだ学ぶところがあると思っています。

最近、今まで継続的に関わってくださった学生みなさんもコロナ禍では非常に疲弊しているように見えていました。そこで私たちの方でも、仙台で大学にも行けず孤立している彼らに声がけして、離れていても居場所を提供しようと慣れないオンラインでの交流に取り組みました。今では、ライトやカメラのセッティングを一人でできるようになった地域の方もいます。一緒に伴走してくれる若者たちにこたえ、協働していく関係性を地域の側でも継続して作っていきたいと思います。

②正課授業から生まれた学生ボランティアの取り組み

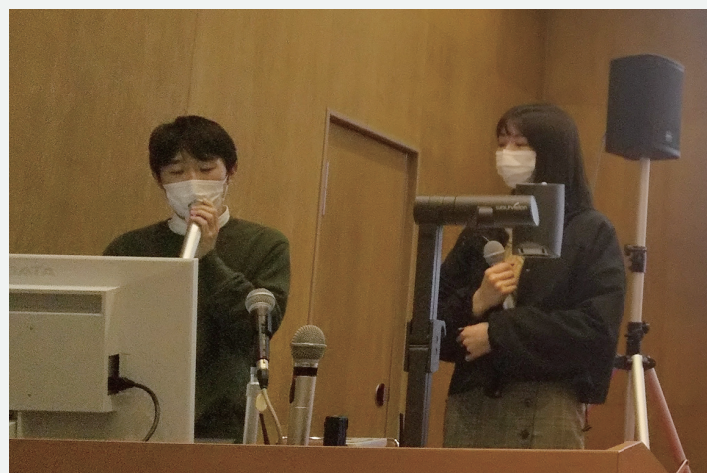
授業から派生したサークルたなぼた

武田：仙台市出身で震災を経験したことから、大学ではボランティア活動をしようと考えていたものの、サークルは忙しそうに見えたので、まずは藤室先生の授業を受講しました。実際に現地に行つて活動してみて、楽しかったので、半年の授業だけではもったいないと感じ、「たなぼた」を結成しました。サークルとしてやっていくことを決めた理由には、楽しかっただけで終わらせたくないに参加学生が感じていたこと、長く関わっている方の思いももっと知りたいと思ったこと、そうした参加者の気持ちを振り返りの機会に共有したことも大きかったと思います。

宇津：私たちの活動の目的は定期的に集まる居場所づくりを通して、地域住民の方に不安や悩みを吐き出していただいたり、日々の楽しみやリフレッシュの機会にさせていただいたりすることでした。しかし、実際に活動を始めると、地域の方が受け入れてくださることで、私たち自身の居場所を作っていただく側面が大きかったと思っています。

武田：「震災の後、何もやる気が起きなくて生きている意味が分からない」と話されていた方が、活動を継続していく中で、「同じ地域の知り合いができて、今日も会いに来た。友達ができた」と私たちの活動に意義を見出してくださったことが印象に残っています。

宇津：こうした活動の成果は、私たちが学生という立場で、若者であり、よそ者であるという点もプラスに働いたのかなと思います。住民の皆さんの悩みや時には自治会長の方の悩みを聞いたりすることもあり、私たちなりの関わり合い方で接してきたことが、良い関係づくりに役立ったのかなと思います。私は活動に参加するのが本当に楽しみだったのですが、それは、たなぼたという団体が授業から派生した同じ目的を持つ人たちのコミュニティで、そ



れゆえの穏やかな雰囲気のおかげもあったのかなと思います。一方で、ボランティアとして社会課題に接するという点では震災から時間が経っているからこそ、住民の方が孤立したり、孤独を感じたりするという側面もありますので、この活動を継続してほしいと思います。そのためのたとえば活動資金の獲得などは学生団体だけでは難しいので、教員の方からサポートいただければと思います。

場の多様性を生み出す

田上：震災後に東京から石巻にボランティアに入り、コミュニティ支援の活動を続けています。なぜコミュニティ支援が必要なのかという前提をお話すると、東日本大震災では仮設住宅に入居される方が抽選だったために、その後の公営住宅への転居においても、全く知らない方と地域で生活を共にすることが起きています。このことは、阪神・淡路大震災の際にも起きた住民の方の孤立とか孤独死ということにもつながり得るわけです。地域で暮らす人たちが入れ替わってつながりが薄れていくということは災害に限った話ではなく、今の地方ではどこでも起きうることだと思います。そのため、あらためて、地域コミュニティの繋ぎ直しの仕掛けが求められています。一方で、住民の皆さんが何か企画をつくろうにも、基盤がないので、有志メンバーで企画しようとしても人手が足りなかったことから、学生の皆さんにも関わっていただきました。学生の方に関わっていただいたことで、場の多様性が生まれたと思っています。私も地域外の人間ですが、長期的に関わっているうちにその立場もだんだん地域内外の境界が曖昧になってきています。そこに、学生の皆さんが関わっていただくことで、議論にもフレッシュな視点が加わったと感じました。

被災地では、災害公営住宅に関する法律や条例整備など、先進的な取り組みもあるのですが、それゆえに対応が難しい最先端の課題もあります。そのため、大学生が地域に関わる切り口は必

シンポジウム

ずしもボランティアだけではないと思います。もちろん、地域で仕事をするという選択肢もあるかと思いますが、それだけではなく研究、教育活動でも関わり続けてもらえる仕掛けを作っていくことができれば、地域活性につながるのではないかと期待しています。そのためには、地域に住む私たちも「学生の皆さんに何が提供できているのか」と問い直すことが重要だと思います。ただの人手ではなく、仲間としてあるためにはどうすれば良いか考え続けていくことで持続的な活動を続けていきたいです。

③被災地支援の経験から伝承・防災につなげる取り組み ボランティアの経験を学間に還元する

渡邊:私は東北大学でのボランティア活動がきっかけで、震災伝承への興味を持ち、博士後期課程で震災伝承の研究を行っています。私は、東北の被災者の想いや震災の教訓を南海トラフ地震の被災リスクが高い地域に伝えることを目的として活動していました。この活動では、東北の教訓をそのまま伝えるのではなく、現地の防災のなかに東北の教訓や被災者の想いを反映させることの大切さを学びました。活動の当初は、東北の教訓を伝えるイベントをやろうと思っていたのですが、受け入れ先が見つからず失敗に終わってしまったんです。その後は、現地の協力者の方々とその地域のニーズを話し合っ、活動を決めるようになりました。例えば、家具の固定のお手伝いをしながら、住民さんとお話して個別の事情にマッチした東北の事例や被災者の想いをお伝えするという活動を行いました。住民さんたちも「遠い東北から若者が自分たちのためにやってきた」ことに驚いてくれて、東北のお話をとても聞いてくださいました。さらに、現地で活動されている方々や現地の大学生と一緒に活動することで、お互いをエンパワメントしあうことができました。活動を続けていく中で「若い」「東北」という強み以外にも自分の強み・価値をもって、様々な地域に貢献したいと思うようになりました。これが、博士後期課程に進学して専門性を身に着けたいと思った理由です。この活動を国際会議で発表したときに、海外の研究者からもとても高く評価していただきました。東北大では活発に行われている学生主体の活動がとても新鮮だったようです。こういう活動は、意欲のある学生と受け入れる地域のほかに、コーディネートする役割の方々のおかげで成立しています。学生が社会に対して挑戦できる場として存在するSCRUMや課外・ボランティア活動支援センターが果たす役割は大きいと考えます。

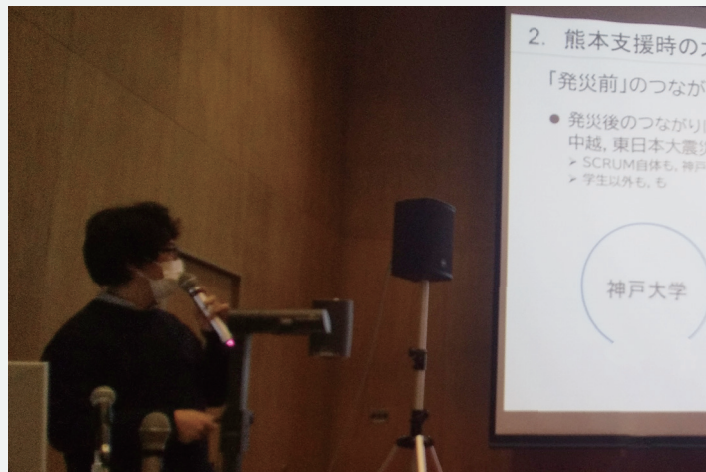
語る言葉を持つということ

藤間:私は震災後、移住し、宮城県石巻市で地域の支援や伝承に関する活動を行っています。日々の震災伝承活動では、被災地

と若者をつないでくれるのは東北大学をはじめとする大学生だと感じています。東北の多くの被災地には大学が立地していないことから若者世代が高校卒業と同時に地元を離れてしまうからです。そのため実は地域の方は、20代の若者と触れ合う機会も少なくなっています。また、被災地でも震災を知らない世代も増えており、伝承自体が難しくなっています。

一方で、東日本大震災においては日本中、世界中から大きな支援をいただいているので、東北に住んでいる以上は「今どうなっているのか、あなたはどうか関わってきたのか」といった質問をされる機会はこの先もあるはずです。その時に、私たちは自分で語れる言葉を持つことが非常に大切だと考えています。私たちというのは、東北で大学生活を過ごした方、あるいは一時的にでも住んだことがあるすべての方が語る言葉を持つということです。

そのための取り組みを松原先生と講義ではじめています。今年度は学生が授業で震災伝承のための動画を作ってくれました。この活動の中で印象的だったことをお話ししたいと思います。動画を作る過程で、学生のみなさんが被災された方にインタビューを行ったのですが、「被災経験のない人ができることはありますか?」と学生の方から伺った際に、インタビューされた方から「私を含む被災した人から聞いた話を伝えることができる」と答えられていました。それで気づきを得たのか、作成された動画は、「私たち制作者は被災経験がありませんが、施設を訪問して、震災と伝承活動について知ることができました。誰もが、震災の教訓を語り継いでいかなくはなりません。ぜひ、被災地や伝承施設に足を運んで震災について学び、語り継げる存在になっていきましょう」と結ばれています。被災をしていない学生が、このようなメッセージを残してくれたことはとても力強かったですし、大きな希望だと思いました。関心を持ってくださった方がこの動画を見ることでエンパワメントされるからです。私たちは、災害で命が失われたい社会を目指して活動していますが、そのことを授業でも後押ししてくださったことはいい機会だったと思っています。



2018年度

授業

被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題とボランティア活動

担当:小田中直樹(経済学研究科教授)

江口 怜(課外・ボランティア活動支援センター特任助教)

菊池 遼(課外・ボランティア活動支援センター学術研究員)

開講時期:【1S】月3~4

共生社会に向けたボランティア活動—人権・多様性・エンパワメント

担当:江口 怜

開講時期:【1S】木5

NPO法人与行政の協働—仙台市の地域課題を解決するアイデアを考えよう

担当:西出優子(経済学研究科教授)

開講時期:【1Q】月3~4

東日本大震災からみる現代日本社

担当:江口 怜、西出優子、菊池 遼

開講時期:【2Q】火1、木1、【2S】月4

被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題とボランティア活動

担当:江口 怜、菊池 遼

開講時期:【2S】木

福島における人権保障と共生の課題—原発事故以降を生きる人々に寄り添う

担当:江口 怜

開講時期【2S】金

ボランティア活動,勉強会

5/15 第1回学内研修「震災の経験を伝えるということ」

講師:佐藤誠悦氏

6/16 南三陸事前研修ツアー(アンバサダー学外研修)

6/30-7/1 いっぱこ合宿(ボランティア団体合同学外研修)

7/28-29 ベイラー大学との協働プロジェクト”Humans of Minamisanriku”(留学生被災地ツアー)

8/10 福島事前研修ツアー(アンバサダー学外研修)

9/23-24 学校防災スタディツアー「震災伝承の課題を学ぶ学外研修」

9/30 子どもの貧困問題解決に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム報告会(夏の福祉・人権ボランティア体験)

10/14 SCRUM学内研修会「私にとってのボランティア」

講師:頼政良太氏

11/18 Fukushima Study Tour(留学生被災地ツアー)

1/15 南三陸事前研修ツアー(アンバサダー学外研修)

2/18-19 震災伝承の課題を学ぶ多大学合同ツアー in 宮城

課外・ボランティア活動研修会

5/15 震災の経験を伝えるということ—いのちを守るための震災伝承の意義

講師:佐藤誠悦氏(元南三陸消防署副署長、震災語り部)

7/3 課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために

講師:八幡悦子氏(NPO法人ハーティ仙台代表、助産師)

10/23 災害ボランティアセンター・運営サポーター養成講座

講師:仙台市社会福祉協議会

12/4 学生団体の組織運営

講師:鈴木 平氏(NPO法人TEDIC 理事)

12/14 自分と仲間の“こころ”を大切にする方法

講師:高橋由佳氏(NPO法人Switch 理事)

2019年度

授業

共生社会に向けたボランティア活動-人権・多様性・エンパワメント
担当:横関理恵(課外・ボランティア活動支援センター特任助教)
開講時期:【1S】月5

ボランティア活動と地域課題ー被災者の生活再建・コミュニティ
形成の課題に寄り添う
担当:松原 久
開講時期:【1S】木4

東日本大震災から学ぶ現代日本社会
担当:横関理恵
松原 久(課外・ボランティア活動支援センター特任助教)
開講時期:【2・4S】月4

福島における人権保障と共生の課題ー原発事故後を生きる人々
に寄り添う
担当:横関理恵
開講時期:【2・4・6・8S】金3

学生ボランティア活動,勉強会

10/20 第1回スタディツアー

2/24-25 第2回スタディツアー

8/7-11/18 子どもの貧困の課題解決に向けたボランティア体
験会(仙台市内NPOでの活動)

9/19-20,11/23 地域課題の解決に向けたボランティア活動(石
巻市雄勝での活動)

緊急災害時の学生ボランティア派遣
2019年台風19号の被災地丸森町、石巻市、福島県いわき市へ
の派遣

課外・ボランティア活動研修会

5/28 大学における学生ボランティア支援の未来 -東北大学か
らの展望
講師:横関理恵
金田理紗(課外・ボランティア活動支援センター事務補佐員)

7/9 課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために
講師:八幡悦子氏(NPO 法人ハーティ仙台代表、助産師)

10/16 災害ボランティアセンター運営サポーター養成講座
講師:仙台市社会福祉協議会

1/7 学生団体の組織運営
講師:鈴木 平氏(NPO法人TEDIC 理事)

2020年度

授業

中止(COVID-19感染拡大のため)

共生社会に向けたボランティア活動-人権・多様性・エンパワメント
担当:横関理恵
開講時期:【1S】月5

ボランティア活動と地域課題-被災者の生活再建・コミュニティ形
成の課題に寄り添う
担当:松原 久
開講時期:【1S】木4

実施

東日本大震災から学ぶ現代日本社会
担当:松原 久
高橋 結(課外・ボランティア活動支援センター特任助教)
開講時期:【2・4S】月4

被災地復興の課題に取り組む
担当:松原 久、高橋 結
開講時期:【2・4S】木5

学生ボランティア活動,勉強会

8/27 第1回水害ボランティア講習会、2020年7月豪雨でつながる学生ボランティア活動報告会

11/18 第2回水害ボランティア講習会、2020年7月豪雨でつながる学生ボランティア活動報告会

11/29 震災伝承ツアー（SCRUM震災伝承部）

12/16 第3回水害ボランティア講習会、2020年7月豪雨でつながる学生ボランティア活動報告会

課外・ボランティア活動研修会

7/21 第1回 ボランティア入門講座

7/31 第2回 ボランティア入門講座

8/21 第3回 ボランティア入門講座

8/28 第4回 ボランティア入門講座

5/19 オンライン・ワークショップ入門～今こそ考えるボランティア活動の意義～
講師:青木将幸氏(青木将幸ファシリテーター事務所代表)

12/2 STUDENTS×UNIVERSITY×GENDER and SEXUALITIES
私たちはジェンダー・セクシュアリティにどう関わっていけばよいか
講師:早稲田大学教職員

12/24 課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために
講師:八幡悦子氏(ハーティ仙台)

2021年度

授業

共生社会に向けたボランティア活動 -人権・多様性・エンパワメント

担当:高橋 結

開講時期:【1・3・5・7S】月3

日本社会・文化A

担当:渡部留美(グローバルラーニングセンター准教授)

開講時期:【1・3・5・7S】月5

被災地復興の課題に取り組む

担当:松原 久

開講時期:【1・3・5・7S】木5

東日本大震災からみる現代日本社会

担当:松原 久、高橋 結

開講時期:【2・4・6・8S】月4

課題解決型(PBL)演習A

担当:松原 久、高橋 結

開講時期:【2・4・6・8S】木5

学生ボランティア活動,勉強会

7/15 多大学プラットフォーム・2021年度災害ボランティア講習会

7/28 国際部ツアー（南三陸町でのスタディツアー）

10/3 第一回学校防災ツアー（石巻市門脇小学校、大川小学校でのボランティア）

1/8-9 第二回学校防災ツアー気仙沼市(陸前高田市の震災遺構をめぐる)

課外・ボランティア活動研修会

6/1 SCRUM・学生ボランティア団体向け「Slack・Drive講習会」

6/22 SCRUM・学生ボランティア団体向け「ファシリテーション研修会」

7/26 災害ボランティア講習会

講師:被災地NGO協働センター 頼政良太氏

11/21 第1回課外・ボランティア活動研修会「セルフケア・ストレスケア入門～ストレスと上手に付き合っていくためには?～」

講師:認定NPO法人 Switch 小野彩香氏

12/21 第2回課外・ボランティア活動研修会「ハラスメント防止に役立つコミュニケーションスキル～自分も相手も大事にする主張の仕方～」

講師:認定NPO法人 Switch 小野彩香氏

2/15 第3回課外・ボランティア活動研修会「強みを活かした活動づくり・団体運営～成果を生み出す組織をつくるために」

講師: 大谷大学 准教授 赤澤清孝氏

12/5 東北大学学生ボランティア支援10年検証シンポジウム

2022年(3月10日現在)

授業

国際教養PBL 東日本大震災の経験を未来につなぐ

担当:松原 久、高橋 結

開講時期:【1・3・5・7S】月3

Study Tour in Fukushima

担当:末松和子(教育学研究科 教授)、渡部留美

開講時期:8/5

学生ボランティア活動,勉強会

7/29 大学間合同災害ボランティア研修会「被災者支援の仕組みと学生にできること」

6/12 学校防災ツアー

(石巻市でのフィールドワーク)

6/18 学校防災ツアー

(オンライン語り部、参加者のワークショップ)

10/8-9 震災伝承ツアー

(気仙沼市、南三陸町でのイベント参加とスタディツアー)

12/22 自主夜間中学に関する講演会

講師:拓殖大学北海道短期大学 横関理恵氏 ほか

2/4 第2回震災伝承講演会

講師:大川伝承の会 共同代表 佐藤俊郎氏

2/5 第1回大川竹あかりワークショップ

連携先:一般社団法人大川竹あかり

2/12 第2回大川竹あかりワークショップ

連携先:一般社団法人大川竹あかり

3/5 第3回大川竹あかりワークショップ

連携先:一般社団法人大川竹あかり

3/11 第4回大川竹あかりワークショップ

連携先:一般社団法人大川竹あかり

3/7 第3回震災伝承講演会

講師:語り部 高橋匡美氏

課外・ボランティア活動研修会

9/16 ファシリテーション研修会

講師:日本ファシリテーション協会 浅羽雄介氏

10/18 災害ボランティアセンター・運営サポーター養成講座

講師:仙台市社会福祉協議会

12/20 キャッチコピーをつくるためのヒント

講師:広告プランナー、ディレクター 松村 洋氏

被災地域と連携した学生ボランティア活動支援の実践 日本財団ボランティアセンター ×東北大学 高度教養教育・学生支援機構 成果発信冊子

発行日：2023年3月31日

発行

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

日本財団ボランティアセンター

企画

高橋 結(東北大学 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教)

松原 久(東北大学 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教)

編集

高橋 結(東北大学 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教)

松原 久(東北大学 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教)

東泉 直宏(東北大学 法学部4年 SCRUM/地域復興プロジェクト HARU)

執筆

渡部 留美(東北大学 グローバルラーニングセンター 准教授/米国・ペイラー大学との協働プロジェクト)

松原 久(課外・ボランティア活動支援センター /オムニバス講義「東日本大震災からみる現代日本社会」)

高橋 結(課外・ボランティア活動支援センター /課題解決(PBL)型演習A,課外・ボランティア活動研修会,シンポジウム)

執筆協力

野村俊介(東北大学 工学研究科技術補佐員/2019年度 台風19号緊急災害支援 丸森派遣)

名古屋 雄大(東北大学 情報科学研究科修士2年/SCRUM,留学生に向けた震災伝承ツアー)

清水 陽花(東北大学 工学部4年/SCRUM,子どもの貧困の課題解決に向けたボランティア体験会)

高橋 真二郎(東北大学 経済学部3年/SCRUM,留学生に向けた震災伝承ツアー)

吉田 敦哉(東北大学 文学部3年/SCRUM,学校防災ツアー)

東泉 直宏(シンポジウム)

※所属・肩書は2023年3月現在

企画協力

一般社団法人 Granny Rideto 桃生 和成

デザイン

わらうたにデザイン 加賀谷 明寛



東北大学

